

◎原 著

## 中高年齢者のアトピー型喘息について

荒木 洋行, 貴谷 光, 周藤 眞康, 谷崎 勝朗

岡山大学医学部附属病院三朝分院内科

**要旨:** 中高年齢(41才以上)のアトピー型喘息患者の特徴を明らかにするために、アトピー型喘息患者 88 例を 0~20才, 21~40才, 41~60才, 61才以上の各年齢別に分け、年齢、性別、発症年齢、既往歴、家族歴、末梢血好酸球、血清 IgE 値、皮内反応の各項目について検討を加えた。結果は、中高年のアトピー型喘息患者は 1) その年代の全喘息患者に占める割合は低く、2) 男性が多く、3) 平均発症年齢は高く、4) その他のアレルギー性疾患の既往歴を持たない症例が比較的多く、5) 皮内反応では、ハウスダスト陽性率が比較的低く、カンジダ、アスペルギルスの陽性率は比較的高い傾向にあった。6) 家族歴、末梢血好酸球、血清 IgE 値では、明らかな傾向は認められなかった。

**キーワード:** アトピー, 中高年齢者, 喘息

**Atopy, patients of middle or advanced age, asthma**

### 緒 言

わが国では、気管支喘息の分類として Swinefold の分類<sup>1)</sup>がよく使われている。この分類のように喘息は根本的にはアトピー性と非アトピー性とに分けられると考えられている。しかしまだアトピー型喘息の統一された定義が無いのが実状である。

また中高年(41才以上)の喘息に注目してみると木村らが明らかにしてきたいわゆる中高年発症型喘息<sup>2)</sup>が多くを占め、この年代のアトピー型喘息についてはあまり問題とされていない。

そこで筆者らは中高年のアトピー型喘息の特徴を明らかにする目的でアトピー性と考えられた喘息患者を年齢により 4 つのグループに分け、8 項目について検討を行った。

### 対象, 方法

岡山大学医学部附属病院三朝分院に通院または入院の経歴のある気管支喘息患者 169 人(男性 89 人, 女性 80 人)の内、以下の 5 項目中 3 項目以上

を満たすものをアトピー型喘息患者と考え対象とした。

1) 発症年齢が小児期または思春期、あるいはアレルギー疾患の家族歴(3親等以内)または既往歴を有する。

2) 末梢血好酸球増多(5%以上)が認められる。

3) 血清 IgE 値の上昇(400 IU/ml 以上)が証明される。

4) 即時型皮膚反応が陽性である(但し真菌類のみに陽性である場合を除く)。

5) P-K 反応または RAST による特異的 IgE 抗体が陽性、または誘発試験が陽性である。

対象のアトピー型喘息患者総数は 88 人(男性 50 人, 女性 38 人)であり、これらを 0~20才, 21~40才, 41~60才, 61才以上の各年齢別に分け、年齢、性別、発症年齢、既往歴、家族歴、末梢血好酸球、血清 IgE 値、皮内反応の各項目について検討を加えた。なお、血清 IgE 値は RIST 法により、皮内反応には鳥居薬品製の皮内テスト用エキスをを用いた。

結 果

1. 年齢による検討

各年齢の全喘息患者数に対するアトピー型喘息患者数の割合をみると0～20才で97.9% (n=48), 21～40才71.4% (n=21), 41～60才33.3% (n=57), 61才以上16.3% (n=43)であり, 0～20才に於てその比率が1番高く, 年齢が高くなるに従って減少する傾向が認められた。(図1)

2. 性別による検討

非アトピー型喘息患者を含めた全喘息患者で男

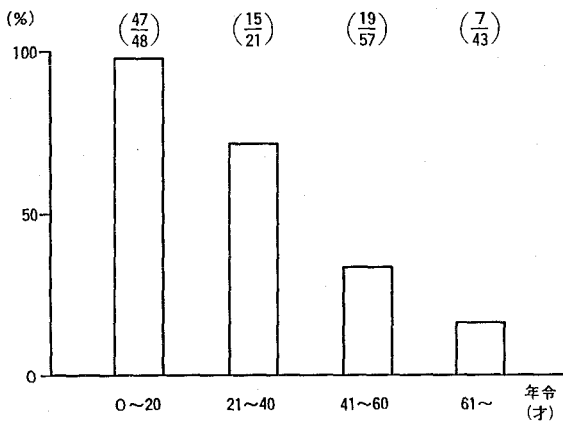


図1. アトピー型喘息患者の年齢による検討

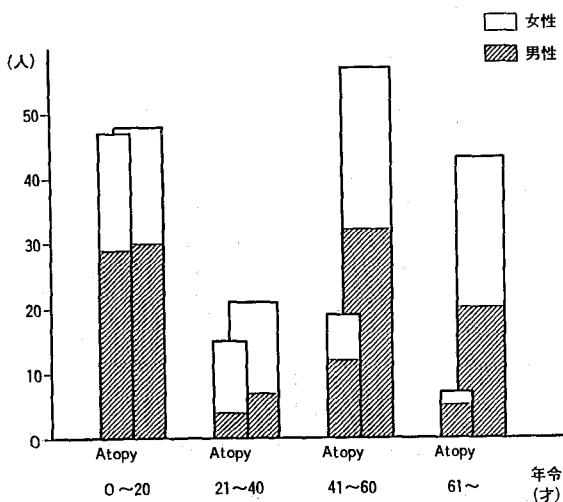


図2. アトピー型喘息患者の性別による検討

性の比率をみると, 0～20才では62.5%と高く, 21～40才では33.3%と低く, 41才以降では56.1%, 46.5%とほぼ半数を占めていた。一方アトピー型喘息患者では0～20才で男性の比率が61.7%と高く, 21～40才では26.7%と低く全喘息患者と同様の傾向を示したが, 41才以降では63.2%, 71.4%と高い傾向にあった。(図2)

3. 発症年齢による検討

0～20才のアトピー型喘息患者の平均発症年齢は3.9才, 21～40才では16.9才, 41～60才では33.5才, 61才以降では48.9才と年齢が高くなるに従って発症年齢も高くなる傾向が認められた。

(図3)

4. 既往歴, 家族歴による検討

既往歴では, アトピー性皮膚炎は若い年齢に多く, アレルギー性鼻炎は各年齢にわたり比較的多く認められた。また41才以降では, アレルギーの既往の認められない症例が半数を占めていた。

(表1)

家族歴では, 3親等以内に気管支喘息の家族歴を有する患者の比率は各年齢とも60～75%とほぼ同様の傾向を示した。(表2)

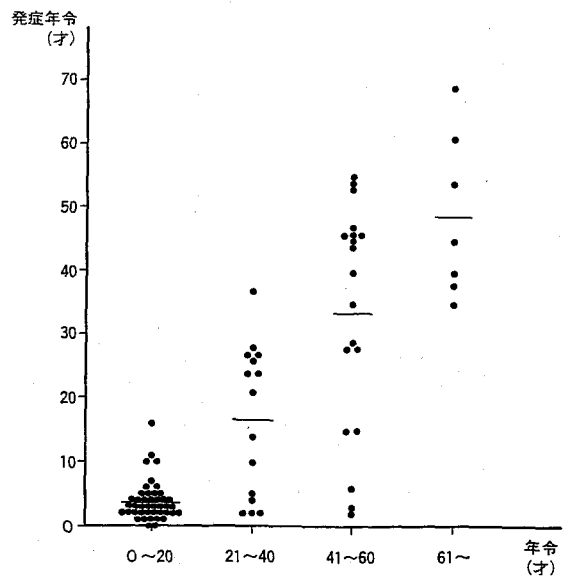


図3. 各年齢別アトピー型喘息患者の発症年齢による検討

	対象者数	アトピー性皮膚炎	蕁麻疹	アレルギー性鼻炎	アレルギー性結膜炎	既往歴無し
0～20才	39	12 (30.8%)	2 (5.1%)	24 (61.5%)	0 (0%)	7 (17.9%)
21～40才	14	4 (28.6%)	1 (7.1%)	8 (57.1%)	2 (14.3%)	2 (14.3%)
41～60才	14	0 (0%)	1 (7.1%)	4 (28.6%)	1 (7.1%)	7 (50%)
61～才	4	0 (0%)	0 (0%)	2 (50%)	0 (0%)	2 (50%)

表1. 各年齢別アトピー型喘息患者の既往歴による検討

	対象者数	家族歴有り
0～20才	21	14 (66.7%)
21～40才	15	9 (60%)
41～60才	13	9 (69.2%)
61～才	4	3 (75%)

表2. 各年齢別アトピー型喘息患者の家族歴（気管支喘息）による検討

5. 末梢血好酸球による検討

各年齢の平均値は、0～20才9.5%、21～40才12.9%、41～60才9.7%、61才以降8.3%とほぼ同様に正常値よりやや高い値を示した。（図4）

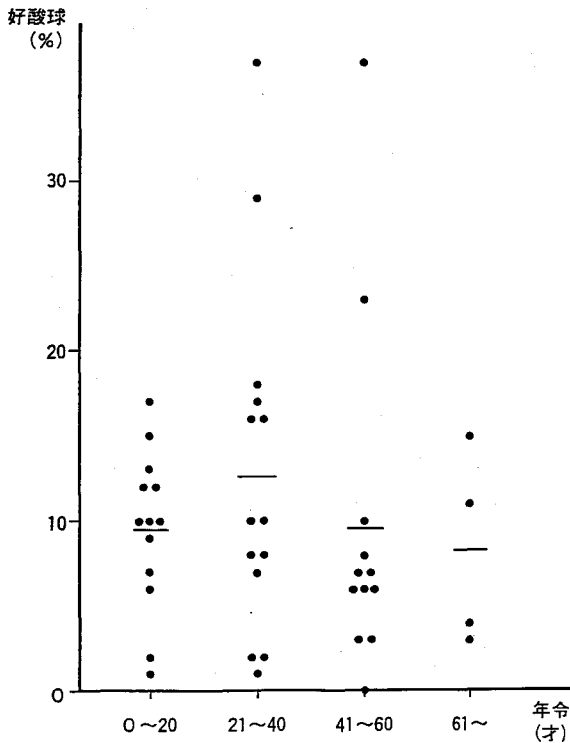


図4. 各年齢別アトピー型喘息患者の好酸球による検討

6. 血清IgE値による検討

各年齢の平均血清IgE値は、0～20才1236.8IU/ml、21～40才479.5IU/ml、41～60才1108.9IU/ml、61才以降1050.4IU/mlであり、21～40才で

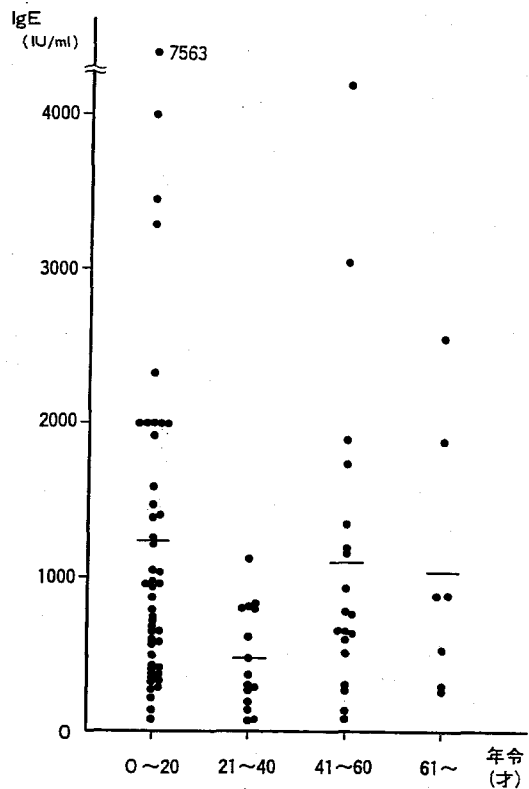


図5. 各年齢別アトピー型喘息患者の血清IgE値による検討

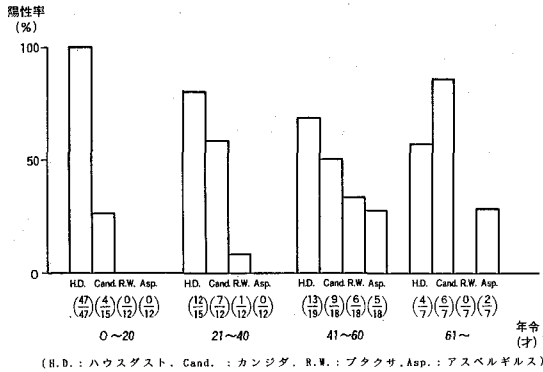


図 6. 各年齢別アトピー型喘息患者の皮内反応陽性率による検討

平均血清 IgE 値が低い場合はほぼ同様の値を示していた。また、2000 IU/ml 以上の著名高値を示す症例は 0～20 才の年齢に比較的多く認められた。(図 5)

7. 皮内反応による検討

皮内反応は即時型のみで判定した。ハウスダスト陽性率は各年齢順に 100%, 80%, 68.4%, 57.1% と年齢が高くなるに従って低くなる傾向にあり、反対にカンジダでは 26.7%, 58.3%, 50%, 85.7% と陽性率が高くなる傾向が認められた。またアスペルギルスも 41 才以降で陽性率が高くなる傾向を示した。(図 6)

考 案

中高年のアトピー型喘息患者では、年齢、性別、発症年齢、既往歴、皮内反応の 5 項目にいくつかの特徴が認められた。

中高年の喘息にはアトピー型が少ないという結果であるが、これは小児喘息の自然寛解、加齢による免疫能の低下が考えられる。また、川上らによれば、60 才以上の喘息患者で、アトピー型は 9%, 混合型 45.5%, 感染型 45.5% となっている<sup>3)</sup>。今回のアトピーの定義からすれば混合型も一部含まれることになり 16.3% はそんなにかけ離れた数値ではなさそうである。

性別では、当院の 0～20 才の症例のほとんどが学童期の者であり、松村らの報告<sup>4)</sup> のように男女

比はほぼ 2 : 1 になっていた。また、21～40 才で女性が多いのは全喘息患者に於て女性の 20 代に一つのピークがある<sup>5)</sup> のを反映したものであろう。しかし、中高年になると、全体では男女比はほぼ 1 : 1 であるのに対し、アトピー型では男性の方が多い傾向にあるのは興味ある結果であった。

発症年齢は年齢と共に高くなり、中高年のアトピー型喘息患者 26 人の内 41 才以降に発症した者は 13 人でアトピー型喘息でも中高年発症例は決して少なくないと思われた。

若年者にアトピー性皮膚炎などの既往歴が多いのはアレルギー・マーチ<sup>6)</sup> の考えからすればうなずける。中高年者には比較的既往歴のない症例が多いのは成人発症のアトピー型喘息が若年者のそれと少し違う事を示唆しているのかもしれない。

血清 IgE 値では加齢による免疫能の低下を反映して中高年例の値が低い傾向が出るのではないかと考えられていたが、平均値では差は認められなかった。

皮内反応ではハウスダスト陽性率が年齢と共に低くなり、カンジダの陽性率は逆に高くなる傾向が認められた。月岡の報告によるとカンジダは、ハウスダストに比べて IgE 抗体が産生されにくい抗原とされている<sup>7)</sup>。中高年のカンジダ陽性率は、カンジダ抗原による感作期間の長さを反映しているのかもしれない。

結 語

アトピー型喘息患者を 0～20 才、21～40 才、41～60 才、61 才以上の各年齢別に分け、8 項目について検討を加えた。その結果、中高年 (41 才以降) のアトピー型喘息患者では、年齢、性別、発症年齢、既往歴、皮内反応の 5 項目に若干の特徴が認められた。

文 献

1. Swineford, O., Jr. : Asthma and Ray fever. Carles C. Thomas Publisher, Springfield, Illinois, 1971.
2. 木村郁郎 : 喘息の病型とその本質論 - 中高年発症型難治性喘息の独立性 -. 日本胸部疾患学

- 会誌 21 : 181-182, 1983.
3. 川上保雄, 上原 哲, 渋谷 徹, 杉田藤子, 中島宏昭, 滝沢 潤, : 老人喘息の問題点. 最新医学. 20 : 1539-1544, 1973.
  4. 松村竜雄, 中山喜弘, : 学童気管支喘息の頻度. 日本医事新報. 2272 : 22, 1967.
  5. 石崎 達, 横張竜一, 荒木英斉, 宮本昭正, 広瀬俊一, 可部順三郎, 大塚正己, 牧野荘平 : 喘息及び蕁麻疹の疫学的研究(2), 患者統計よりみた気管支喘息とその誘因. アレルギー. 11 (11-12) : 343-348, 1962.
  6. 馬場 実 : 各科領域からみた喘息. 1. 小児科. THE 7th ROKKO CONFERENCE 喘息を如何に考えるか. メディカル トリビューン : 210-217, 1987.
  7. 月岡一治 : カンジダ喘息の発生機序に関する研究. 第2報 カンジダに対するIgE抗体とアトピー素質との関連について. アレルギー-31 : 1029-1034, 1982.

#### Atopic asthma in patients of middle or advanced age

Hiroyuki Araki, Hikaru Kitani,  
Mitsuyasu Sudo and Yoshiro Tanizaki

Division of Medicine, Misasa Hospital,  
Okayama University Medical School

In order to elucidate the characteristics of atopic asthma in patients of middle or advanced age (over 41 years old), 88 atopic asthmatic patients were divided into 4 groups according to their ages, 0~20, 21~40, 41~60 and over 61 years old, and age, sex, age of onset, past history, family history, number of peripheral eosinophils, serum IgE and skin test were compared among these groups. The results were as follows:

Atopic asthmatic patients of middle or advanced age were 1) less frequent in all asthmatic patients of same age group, 2) more frequent in males than in females, 3) higher in averaged age of onset, 4) more frequent in cases without other allergic past histories, 5) less frequently positive to house dust and more frequently positive to *Candida* and *Aspergillus* in skin test, 6) not different in family history, number of peripheral eosinophils and serum IgE compared to other groups.